

エルサレム神殿の門で、四十年歩いたことがない男を使徒ペトロとヨハネが「**イエスの名によって立って歩かせる**」という奇跡が起こった。これに驚いて集まった民衆たちに向かって、ペトロの“神殿説教”と呼ばれる説教が繰り広げられた。前回はその前半のところを学んだ。この奇跡は、十字架で殺された主イエスが復活して生きておられるその「**イエスの名**」が、この男に信仰を起こさせて実現した出来事なのだと、そういう説明である。

このペトロの神殿説教の後半は、今度は、主イエスを十字架刑につけたエルサレムのユダヤ教徒たちに「**悔い改め**」を勧める勧告である。ペトロの五旬節の説教でもやはり悔い改めの勧めはあったが、今回のものが遥かに丁寧に、そして詳しく語っている。

17 節

「ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。」

「あなたがたがあんなことをしてしまった」とは、前回の13節から15節までに、3つのコントラストをもって描かれたイスラエルの民たちの愚かさ、愚行のこと。すなわち、①「**神が栄光をお与えになる僕イエス**」を「**あなたがたは……引き渡した**」。②「**ピラトが釈放しようと決めていたのに**」「**あなたがたは**」釈放を「**拒んだ**」。③「**聖なる正しいお方を**」「**人殺しの男**」バラバと引き換えてしまい、「**命への導き手である方を殺してしまいました**」。

これらが間違いであったことは、神様がイエスを「**死者の中から**」甦らせた事実によってはっきりしているし、「**わたしたちは、そのことの証人です**」とペトロは言う。

この愚かな仕業は、実は主イエスがそんなに大変なお方だということを知らなかった「**無知**」からなされたのだ、という。十字架上で主イエスは、神様に祈った「**父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか分からないのです**」(ルカ23:34)。彼らは「**無知**」から行動したのである。そのことをここで再度確認している。

18 節

「しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なされたのです。」

「**メシアの苦しみを**」「**すべての預言者の口**」が「**予告した**」というのは、ルカ好みの誇張した言い回し。大体、旧約聖書は「**メシア**」という言葉を実際の地上の祭司や王に使うので、これからやがて来る救い主を表すのはわずかししか使っていない(イザヤ45:1、ダニ9:25, 26)。

だから「**メシアの苦しみ**」を予告していた預言というのは、もっといろんな形の受難

の言葉を考えているのではないかと思われる。イザヤ書 49 章 1 節から 6 節、あるいは 50 章 4 節から 9 節、また 52 章 13 節から 53 章にかけて、いわゆる“受難する主の僕”という者が預言されていた。主イエスもゲッセマネに行く前にその一節を引用された（ルカ 22:37）。

あるいは、ゼカリヤ 13 章 7 節「**剣よ、……羊飼いを撃て、羊の群れは散らされるがよい**」という表現がある。マルコによる福音書 14 章 27 節では、これを主イエスはゲッセマネで引用しておられる。

以上のように、いろいろな形の苦しみの預言を総合的に“メシアの受難”と呼んでいるのであろう。

この節で大事なことは、メシア・イエスの受難を神は「**予告しておられた**」こと。そしてその通りに「**実現**」されたということである。このことは、五旬祭の説教でもペトロは言った（2:23）。

つまり、イエス・キリストの十字架という出来事の本当の意味と目的を知っていたのは「**神**」であられる。エルサレムのユダヤ教の「**指導者**」も「**民衆**」もその本当の意味を知らない「**無知**」から行動していたのである。

19 節

「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。」

「自分の罪」の「罪」は、複数形(sins)でもろもろの罪。罪によって主なる神から離れている人間がその神様のもとに立ち帰って来ることが「悔い改め」ることである。「悔い改め」をヘブライ語で「**テシューバー**」というが、それには「**立ち帰り**」という意味がある。「悔い改めて立ち帰りなさい」というのは、ただ単なる後悔とか、ただの心変わり、変心ということではなくて、まことの神のところに「**立ち帰る**」ことである。「**だから、自分の罪が消し去られるように**」、神様に立ち帰ることが勧められている。

「消し去られる」と訳されている言葉(ἐξαλειφθῆναι、エックサレイポセーナイ)は、もともとは「**完全に塗り上げてしまう**」、ペンキなどで「**完全に塗ってしまう**」ということ、そこから場合によっては「**消してしまう**」ということにもなる。これが受身になると、「**拭い取られる**」「**消される**」という意味で使われる（コロ 2:14、黙示録 7:17、21:4）。

エルサレムのユダヤ人たちが主イエスを「**十字架につける、十字架につける**」と言ってイエスを処刑してもらった時には、真相を知らなかった。その方が「**神の僕、聖なる方、正しい方、命への導き手**」であられることを。その「**無知**」の故であるから、罪が赦される、「**罪が消し去られる**」可能性がある、というのである。テモテへの手紙 1 章 13 節でパウロは自分の過去を振り返ってこう言っている。

「以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。」

どれほど乱暴狼籍であつても知らなかったことなので、憐れみをうけた。だから、エルサレムのユダヤ教徒たちも、あれほどの罪を犯していても、それは「**無知**」だったの

だからという根拠で「罪が消し去られる」可能性がある。「だから、……悔い改めなさい」と呼びかけているのである。

20-21 節

「こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。」

「こうして～してくださるのです」と、新共同訳はあたかも悔い改めの結果のように訳しているが、本来はこの接続詞は目的を表す。だから、口語訳でも新改訳でも「それは～するためです」と訳されている。

自分の罪を消し去られるように、というのが個々人の直接的な期待、目的を表したとすると、20 節以下に書いてあるのは、もっと大きな歴史的な関連でその目的を語る、そういう壮大なところである。

それは、「主のもとから—主の御前から—慰めの時が訪れるために」。

ここで「慰め」と訳されている言葉 (ἀναψύξεως、アナプクセオース) は、新約聖書ではここしか出て来ない。動詞も一回「励ます」と訳して出てくるだけ (Ⅱテモ 1:16)。本来は「息をつく、リフレッシュする」と言う意味からできている言葉。「神の御前から訪れるリフレッシュの時」。

これを言い換えたのが、21 節の「万物が新しくなるその時」。口語訳「万物更新の時」

「万物が新しくなる」という言葉 (ἀποκαταστάσεως、アポカタスタセオース) も新約聖書ではここしか出て来ない。動詞は 1 章 6 節に、弟子たちが主イエスに「イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」とお尋ねしたあの「建て直す」と訳されている言葉である。あるいは、手の萎えていた人がイエス様にいやされて「元どおりになった」(ルカ 6:10) と訳されている言葉。

これらの翻訳から分かるように、決して、ただ新しくなるということではなくて「建て直す、元どおりになる」というふうに、「回復されること、再びもとのように回復される新しさ」のこと。

神様が創造された万物、世界が人間の墮落によって虚無に服し破壊されていたのを生まれ変わらせ、元に戻し、リフレッシュする、そういう思想である。

この終末的な世界の再生、万物更新の時に、イエス・キリストが再臨なさる。そのイエス・キリストの再臨を、ペトロは 20 節で「主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです」と言っている。

「主なる神が、イエス・キリストを遣わす」。この言い方は、主イエスの再び来られる再臨を表すこととしては、ここでしか使われない非常に珍しい言い回しである。普通

“神がイエス・キリストを遣わされた”というのは、2千年前のクリスマスの出来事、受肉の出来事である。この第一回目、神様が主イエスを救い主として人類の中に遣わされた時、エルサレムのユダヤ人たちは「無知」の故にとんでもない失敗をした。でも、もう一度その主を神様は「遣わしてくださる」のだから、今度こそ失敗のないように早く悔い改め、イスラエル自身が建て直っていなければ、こういうのである。

しかも、その遣わされてくださるお方は、審き主としてではなくて「**あなたがた—イスラエル人—のために前もって決めておられた、メシア**」である。

十字架に架かる前に主イエスは、この再臨の話を、ルカによる福音書 21 章 27 節、28 節でこういうふうに預言された。

「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

「再臨」なり「終末」というものを不安と恐怖の目で「見る」一般の人々がいる。だが、その同じ出来事を自分たちの「**解放の時、あがない**」であるという喜びをもって迎える「**あなたがた**」イエス様の弟子たちがいる。これははっきり違う。だから、今ペトロはエルサレムのユダヤ人たちに向かって、この「**あなたがた**」つまり主イエスの弟子たちの側が変わるように勧めているのである。「**あなたがたのために前もって決めておられた、メシア**」が「**遣わ**」されてくるのだ。だから、それをそういうお方として、“われわれの救い主だ”と言って迎えらるる者になる、主イエスの弟子の中に加わる、これを勧めている。

21 節

「このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。」

「必ず～することになっています」というのは、神様の御定めを表す言い回しで、「～すべきである」という言い回し。「天はこのお方を万物更新の時まで受け入れているべきである」、そういう神の定めである、という。つまり、幸いにも時間はある。悔い改めて立ち帰ってくるために時間は充分ある。だから「**悔い改めて立ち帰りなさい**」、そう言っているのである。

「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」（Ⅱペトロ 3:9）。

一人でも多くの方が悔い改めて立ち帰るようにと、神様は忍耐して待っておられる。それが、「**万物が新しくなるその時まで**」、天がイエスを受け入れていなければならない、という神の御定めの意味である。だから、「**兄弟たち**」、この時に「**悔い改めて立ち帰りなさい**」。「**今や、恵みの時、今こそ、救いの日。**」（Ⅱコリ 6:2）。